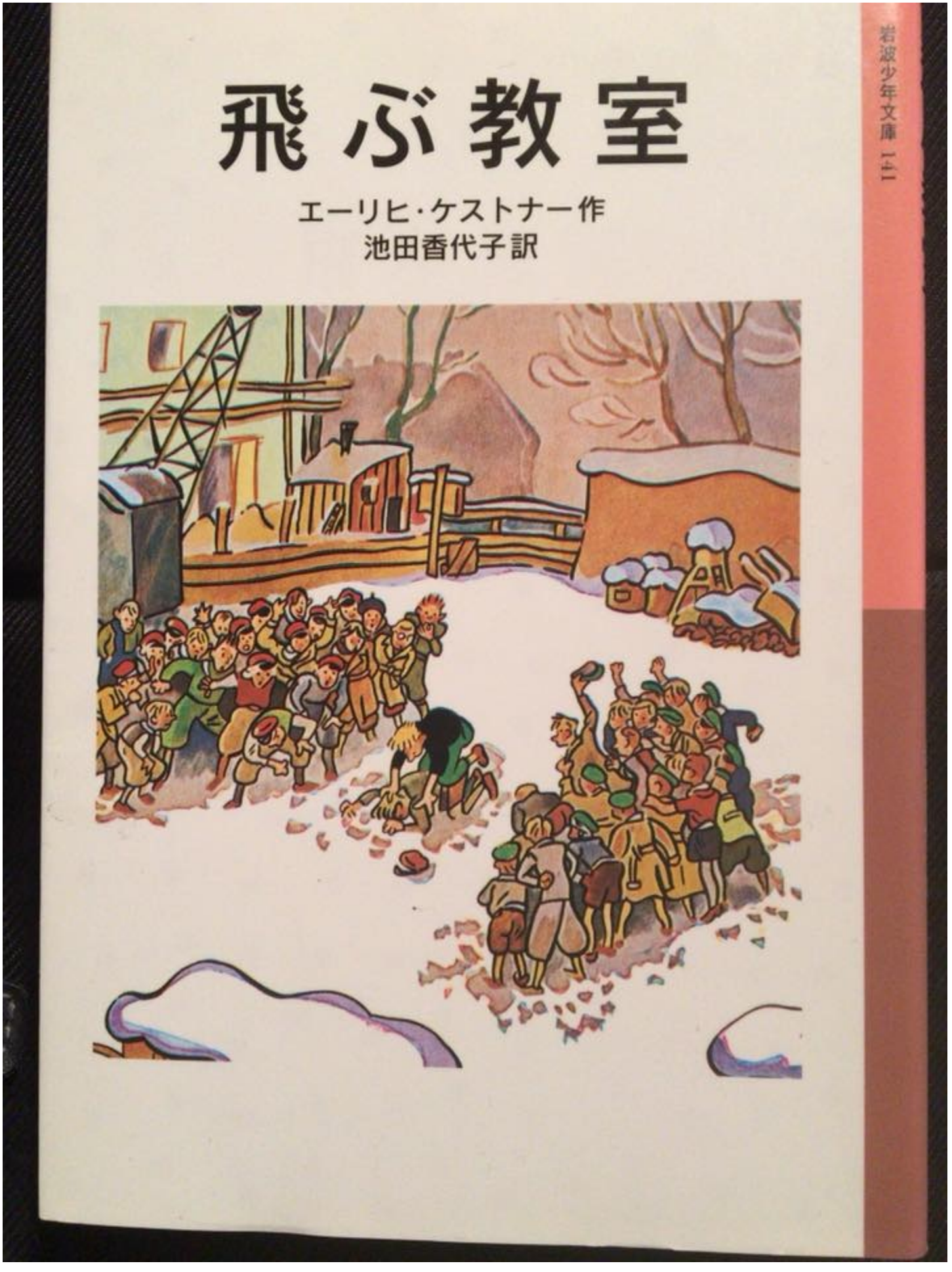
WARM FEELINGS


飛ぶ教室
エーリヒ・ケストナー作
池田香代子訳
岩波少年文庫 141

"世界の歴史には、かしこくない人びとが勇気をもち、かしこい人びとが臆病だった時代がいくらもあった。これは正しいことではなかった"ドイツの寄宿学校を舞台に少年たちが繰り広げる青春の日々も、子供目線から大人になって眺め直すと、また違って見えて面白い。

ナチスによって、図書館の棚から自著が排除されたり、目の前で焼かれたりの迫害を受ける中で、児童書という形で、子ども達に希望を託しつつ、一方で"わたしたちは年をとった。でも若さは失っていない。わたしたちはよくわかっている。わたしたちふたりには"正義さんと禁煙さん。主役組のジョニーとマルティンの会話に、ユダヤ人として逃亡せざるを得なかったパートナーの挿絵画家、トリアーへの確かな友情も感じられるからだ。

クリスマスに子どもさんへ。あるいは大人になっても若さは失っていない誰かにオススメ。

LIVING IN TOKYO
東京に暮す
1928—1936
キャサリン・サンソム著
大久保美春訳
By
Katharine Sansom
With 42 Illustrations,By
Marjorie Nishiwaki
青 466-1
岩波文庫

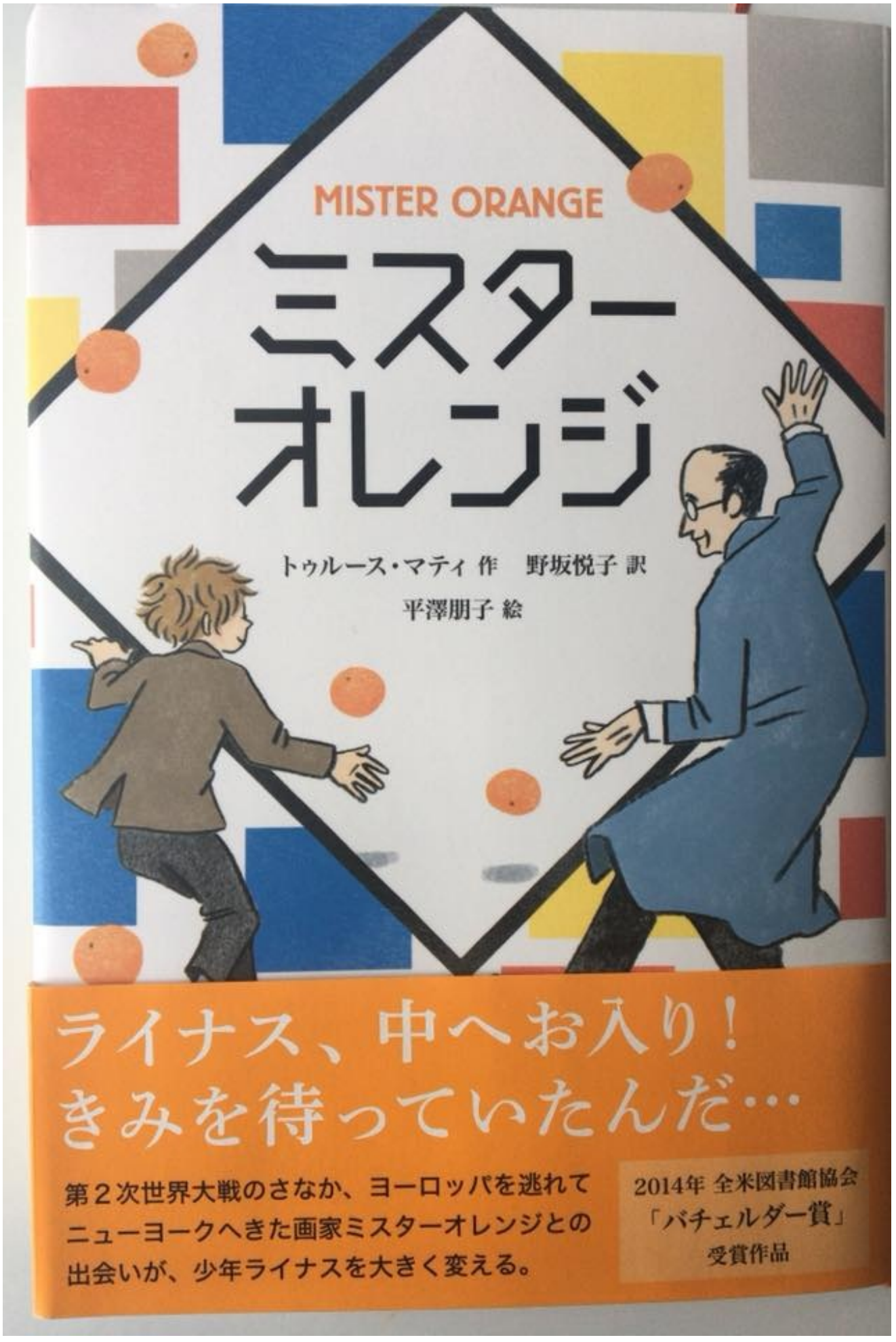
"二十世紀の人類は、東洋人も西洋人も、一緒に笑い、語り、学ぶことで(中略)進取の気性に富んだ先輩たちの仕上げをしなくてはならないのです"昭和初期に東京に暮らした英国女性の随筆である本書は、戦争間近な中で、暖かい目で日本を理解し英国に紹介している平和への願いの良書として時代を超えて貴重な一冊。

個人的には、読み始めてすぐに驚いたのが、外交官であった夫と共に政治情勢が極めて悪化する1928年〜1936年に日本に滞在した著者の【聡明さ、公平さ】でした。同じ女性でも科学者として軍事目的で来日せずに俯瞰的、冷静に日本を分析した【菊と刀】ともまた違い、あくまで実際の生活者視点で紹介される戦前の明るい日本人の様子は、紅茶の入れ方から、運転の荒さまで多岐にわたりつつも、常に【理解しようと努める好意とユーモア】に満ちた著者の眼差しのおかげで、何ともほっこりと胸にきます。(著者の友人が描いたイラストも素晴らしい)

また"何より沢山いる子どもたちを大切にし電車でも先に座らせます""老人はほかの国に比べて気品があり周囲から尊敬されています"といったご先祖さまたちの描写には、わずか100年でこの国が何を失ってしまったかが如実に伝わってきて、こちらも考えさせられるものでした。

戦前の日本の生活者の様子を知りたい誰か、あるいは"この世界の片隅に"みたいに苦境の中でも明るさを失わないご先祖さまの姿から元気をもらいたい誰かにもオススメ。

ミスターオレンジ


MISTER ORANGE
ミスターオレンジ
トゥルース・マティ 作　野坂悦子 訳
平澤朋子 絵
ライナス、中へお入り！
きみを待っていたんだ…
第２次世界大戦のさなか、ヨーロッパを逃れて
ニューヨークへきた画家ミスターオレンジとの
出会いが、少年ライナスを大きく変える。
2014年 全米図書館協会
「バチェルダー賞」
受賞作品

"『あともう少しで完成だ・・わたしはついにブギウギを、この絵にとらえたんだ』ミスターオレンジは両手をパンとたたくと、立ち上がった。"第二次大戦を舞台にオランダの作家が描くNYに住む少年と外国人作家との出会いと成長を描いた本書は、想像力の本当の価値を伝えてくれます。

個人的には、戦争の当事者同士ではなく、それに否応なく【巻き込まれてしまう】残された家族を題材にした良作を探す中で、本書に辿りついたわけですが。

読み進めている内に少年がオレンジの配達先として出会う外国人画家が、実在の水平と垂直の直線のみによって分割された画面に【赤・青・黄の三原色のみを用いる】というストイックな原則を貫いて作品づくり(作中では、遺作となったヴィクトリーブギウギ http://www.geocities.jp/etsuji_suzuki/museum/neatherlands/gemeente/gemeente-v.html)に取り組んだ抽象画家のモンドリアンである事がわかり、何とも【フィクションとノンフィクションの間】に連れていかれるような不思議な読後感でした。

また主人公の少年の世界を取り巻く家族や友人、そして画家といった周囲の人たちの言葉や振る舞いは戦時下にあっても、基本的にとても優しく。こちらも何だかホッとさせられる感覚でした。

少年の爽やかな成長物語が好きな誰か、あるいは美術やモンドリアンの遺作の【ヴィクトリー・ブギウギ】ファンの誰かにオススメ。

アウシュヴィッツの図書係

"『これが君の図書館だよ。ささやかだけどね』彼女の反応をそっと見ながらヒルシュが言った。図書館と言えるほどのものではなかった。本は八冊しかなく、ずいぶん傷んだものもある。でも本は本はだった"アウシュビッツに存在した図書館の話を描く本書は人の尊厳について考えさせてくれる。

個人的には刑務所図書館について調べている中で本書と出会ったのですが。【アンネの日記】や【夜と霧】とはまた違った視点、強制収容所に囚人たちによってひっそりと作られた"学校"、そこにあった8冊だけの秘密の"図書館"を舞台に、図書係として奮闘する実在の少女ディタ、そして重圧に苦しみながらリーダーとして振る舞うヒルシュの姿を軸に、ジャーナリストである著者が、膨大な関連資料を背景に、それでも描けない部分を【真摯なフィクション】で補っていて、本の与えてくれる【希望としての生きる力】を感じることができました。

また、本書では前述の2人とは別に、様々な人物たちが登場し、ＳＳとユダヤ人少女の恋愛、脱獄計画の実施と目まぐるしく場面転換しながら、さながら群像劇の様に小さな物語が展開していくのですが【強制収容所の残虐さ、悲惨さ】の中でも、それぞれに【生き延びる為に葛藤する】姿が息遣いすら感じるかの様に細かく描写されていて印象に残りました。

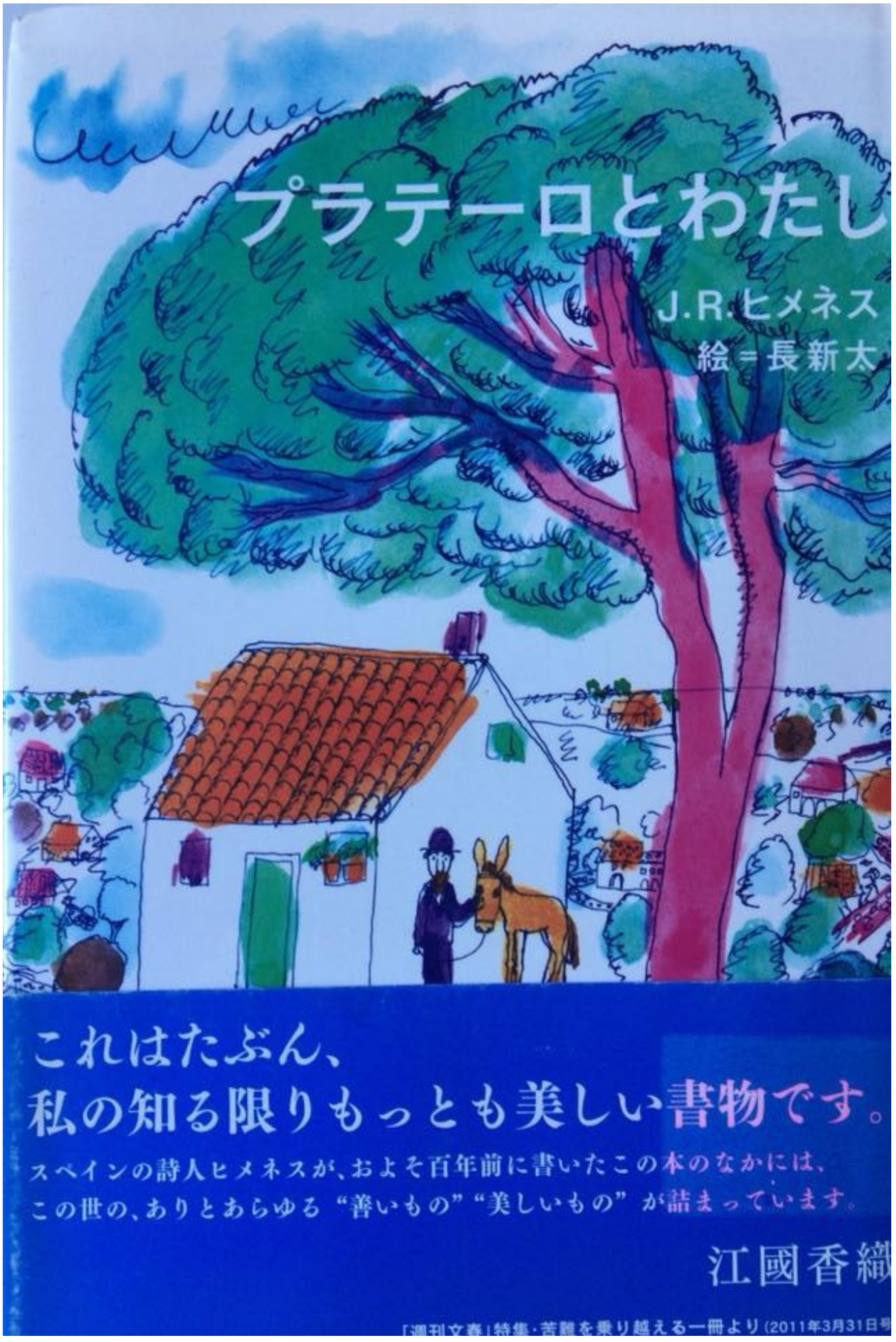
最後に著者の後書きから抜粋。

"もしも美しいものを見ても感動しないなら、もしも目を閉じて想像力を働かせないなら、もしも疑問や好奇心を持たず、自分がいかに無知であるかに思いが及ばないなら、男にしろ女にしろ、それは人間でなく、単なる動物にすぎない"

人は【パン(とサーカス)のみに生きるべからず】個人的な意見で恐縮ですが、国内では貧困や格差で不満がたまる中、まるで【目を背けさせるかの様に】オリンピックや万博を盛り上げる記事が喧伝されている様にも感じられる今だからこそ。警鐘を鳴らす意味でも多くの人に本書を手にとってもらいたいと思いました。

本のもつ力、人間の尊厳について考えたい誰かに、また強制収容所について、残虐さや悲惨さとはまた別の視点から考えたい誰かにオススメ。

プラテーロとわたし


プラテーロとわたし
J.R.ヒメネス
絵＝長新太
これはたぶん、
私の知る限りもっとも美しい書物です。
スペインの詩人ヒメネスが、およそ百年前に書いたこの本のなかには、
この世の、ありとあらゆる“善いもの”“美しいもの”が詰まっています。
江國香織
「週刊文春」特集・苦難を乗り越える一冊より（2011年3月31日号

"プラテーロよ、おまえは昔、孤独だった。だが過去は、これ以上おまえに何を与えるだろうか？"ノーベル賞受賞の詩人である著者が散文詩形式で丁寧に描写するスペインの田舎、そして愛する驢馬プラテーロの四季における姿は、どこから読んでも、何度読んでも。果てしなく美しく優しい。

個人的には、江國香織の著作での紹介や、朗読等で本書の存在は知っていましたが、ようやく今回手にとって読むことができました。小さくて、ふんわりした銀色の驢馬であるプラテーロに絶え間なく詩人が語り続ける形式で進行する本書は、ある意味で偏った一方通行の一人視点でのみ世界が語られているわけですが。それでも(作中で著者自身が述べているように)安易に擬人化してプラテーロに人間の様に語らせたりしていない事が、かえって美しく優しい言葉の数々から読者自身に【イメージを補い膨らませる】余地を与えてくれていて、この本自体に稀有な存在感を与えているように感じました。

驢馬に限らず動物好きな誰かや、愛車やお掃除ロボットに名前をつけてしまってしまう誰かに。はたまた辛いことがあったりで、とにかく美しく優しい言葉の世界に飛び込みたい誰かにオススメ。

クリスマス・キャロル

クリスマス・
キャロル
ディケンズ
村岡花子 訳
A CHRISTMAS CAROL
Charles Dickens
文豪が贈る愛と感動のクリスマス・プレゼント！
新潮文庫
「クリスマス・キャロル」の
創作過程を描くファンタジー
映画公開
「Merry Christmas!
ロンドンに奇跡を起こした男」
11月30日(金)より
出演 ダン・スティーヴンス、
クリストファー・プラマー
SHINCHO BUNKO

"人によっては彼が別人のようになったのを見て笑ったが、彼はそういう人たちを笑うがままにしておき少しも気にかけなかった"描写の巧みさとユーモアで知られる英国の国民的作家が1843年に発刊した本書は最も有名なクリスマス文学としてだけでなく【心を開けば世界は変わる】事を教えてくれる。

個人的には、既に何度も舞台化や映画化をされた作品ではありますが、最近も【Merry Christmas！〜ロンドンに奇跡を起こした男〜】(予告編→https://m.youtube.com/watch?v=ELEu7VhJYu4)の上映や、VR作品化(https://www.google.com.tw/amp/s/www.moguravr.com/chained-a-victorian-nightmare/amp/)などで話題になっていたことから久しぶりに本書を手にとったのですが。

正直幼い時は、よくある【子供向けの教訓物語】としての認識でしか記憶に残っていなかったのですが。この作品が出版された当時の、産業革命により現代の基準から見れば顔色が真っ青になりそうな【ブラック労働や格差の増大】など【都市化による社会問題】が噴出していた時代に、その実態を広く世に知らしめようと考えて書かれた【社会派小説(今風に言えばソーシャルキャンペーン？)でもある】ことが大人になって、わかってくると、また違った魅力を感じます。

加えて、実際に本書がベストセラーになると、改心した登場人物のスクロージの姿に感銘を受けて、巷では【メリークリスマスという挨拶が流行し】富裕層の中にも【寄付しようとする人が急増】一方で著者も応えるようと続編となるクリスマスシリーズを執筆し続けた結果、現在における、その日は【誰もが家族や隣人に暖かな眼差しを向ける】クリスマスが定着したエピソードなんかも知ると、いつしか【カップルたちが消費する日】と定着している【どこかのお国事情】を思い出して、少し恥ずかしくすらなります。(まさにリア充爆発しろ！ですね)

クリスマスを恋人や家族だけでなく【見ず知らずの誰かを想う】1日にしたい誰かに。また近代における【ソーシャルキャンペーン事例】を探す誰かにオススメ。

ハローサマー、グッドバイ

”これは恋愛小説であり、戦争小説であり、SF小説であり、さらにもっと他の多くのものである。”約40年前の1975年、イギリス初の女性首相サッチャーが誕生した年に発刊された本書は「ラスト数ページのドンデン返し」でも有名だが、冒頭で著者が述べている様に恋愛、戦争、SFの魅力的な要素がボーイミーツガールを軸に凝縮されており、特に中盤から後半にかけての展開にはグイグイと引き込まれる。

個人的には、主人公とヒロインの間の甘ずっぱい、しかし何とも心をうつ描写に惹かれつつ、一方で冷戦状態であった時代に本書の著者が、この小説を通じて何を伝えたかったのか？を色々と考えてしまった。続編はどうしようかな。

古き良きSF青春小説を読みたい誰か。ドンデン返しに興味のある誰かにオススメ。

ON READING
André Kertész

読　む　時　間

なんて不思議…あなたは思わず微笑みます
違う文字が違う言葉が違う声が違う意味でさえ
私たちの魂で同じひとつの生きる力になっていく

しばらく目を木々の緑に遊ばせて
あなたはふたたび次のページへと旅立ちます

谷川俊太郎　巻頭詩「読むこと」より

アンドレ・ケルテス

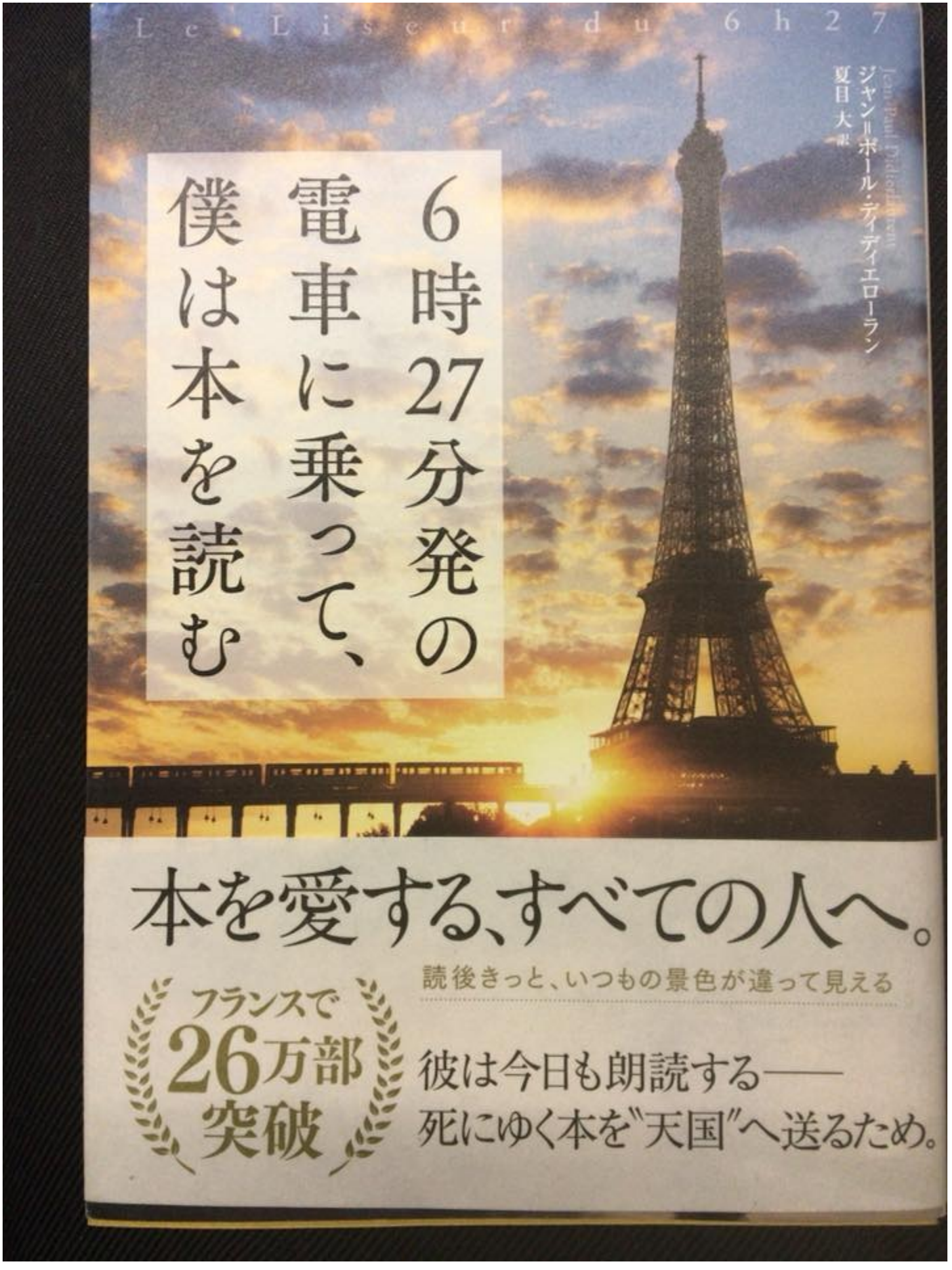
創元社

"いまこの瞬間この地球という星の上で いったい何人の女や男が子どもや老人が 紙の上の文字を読んでいるのだろう"と詩人の谷川俊太郎が詩を寄せたハンガリー出身の写真家による本書は、憂鬱になりがちな月曜日に、通勤や通学途上で本を読む人全てに時間を越えた対話を提案してくれる。

個人的には、名古屋の某有名書店の名前が本書から拝借されたくらいの知識はあったものの、肝心の写真については、本書を通じて初めて拝見したわけですが、1928年から1970年代までの世界各地で、様々に本を読んでいる人たちの姿からは、ページをめくる度に、読書に静寂を求められるような、エールを贈られてるような不思議な時代を超越した感覚をもたらしてくれました。

全ての本好きに、そして構図にこだわる写真好きな誰かにオススメ。

6時27分発の電車に乗って、僕は本を読む



"僕は本が大好きです。でも、起きている時間のほとんどは本を破壊することに費やしています"主人公の断裁工場で働きつつ、毎朝6時27分発の電車で【生き延びたページ】を朗読する儀式の描写から始まる本書は、ちょっと変な登場人物達が、それでも周囲から好意的に受け止められていく様子が爽やかな読後感を与えてくれる。

個人的には、フランスではないし、朗読でもないけれど、同じく6時台の電車にのってランダムに作品達と向き合う毎朝を重ねている事もあり、不思議な親近感を覚えました。

大作ではないけれど、朝の読書をする方に、そして穏やかな作品を読みたい誰かにオススメ。

書店主フィクリーのものがたり

"ぼくたちは読む、そしてぼくたちはひとりぼっちではない。"2016年本屋大賞、翻訳小説部門1位の本書は、島に住む本屋店主の温かい再生物語といった形で、国と言葉を越えて(素晴らしい翻訳！)本の素晴らしさを伝えてくれる。

そして個人的にも"本屋のない町なんて、ほんとうの町じゃない""(あなたは父親、恋人。。中略)そしてこの土地に文化を提供するひと"といった作中のセリフに【人生最後の挑戦】のひとつとして、自身も【本屋経営をしている1人】として、勇気付けられる想いになりました。

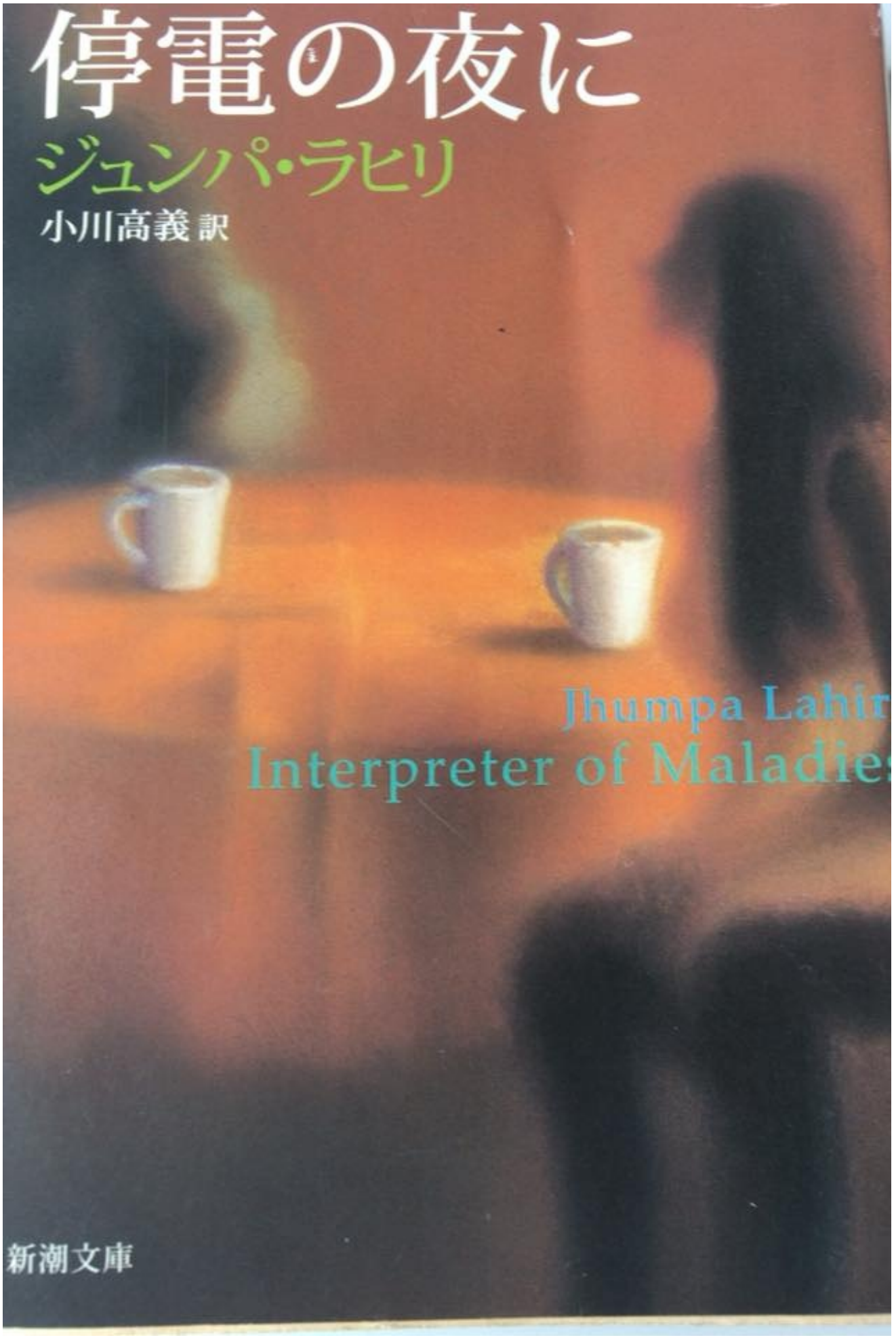
本に関わる全ての人に、そして中年からの人生の再生物語を探す誰かにオススメ。読むぼくたちは決してひとりぼっちではない。

レイチェル・ウェルズ
中西和美＝訳
通い猫アルフィーの奇跡
飼い主を亡くした一匹の猫の、涙と笑いと、奇跡の物語。
世界を変えるのは、猫なのかもしれない。
全英絶賛!
ハーパーBOOKS創刊!

"通い猫は根性なしでは務まらない。数週間、僕は四軒の家を切り盛りするので大忙しだった"著者紹介が【愛猫家】から始まるほどの猫好き著者の人気シリーズ1冊目となる本書は傍観者でなく、積極的に人間家族に関わってくるアルフィー、そして猫社会のしたたかさが面白く愛くるしい。

個人的にも猫好きというのもあって、読み始めた当初は"吾輩は猫であるのイギリス版？"と捉えていたものの、むしろそれ以上に猫好きなら"わかるわかる"と愛情豊かな描写や一方で猫目線でのイギリス現代社会の様子が興味深く、また各チャプター毎が短い事からリズミカルに最後まで読み進める事ができました。

猫好きはもちろん、ペットロスを感じている誰かにオススメ。(SNS連動企画も積極的です。http://www.harpercollins.co.jp/alfie/)


停電の夜に
ジュンパ・ラヒリ
小川高義 訳
Jhumpa Lahir
Interpreter of Maladie
新潮文庫

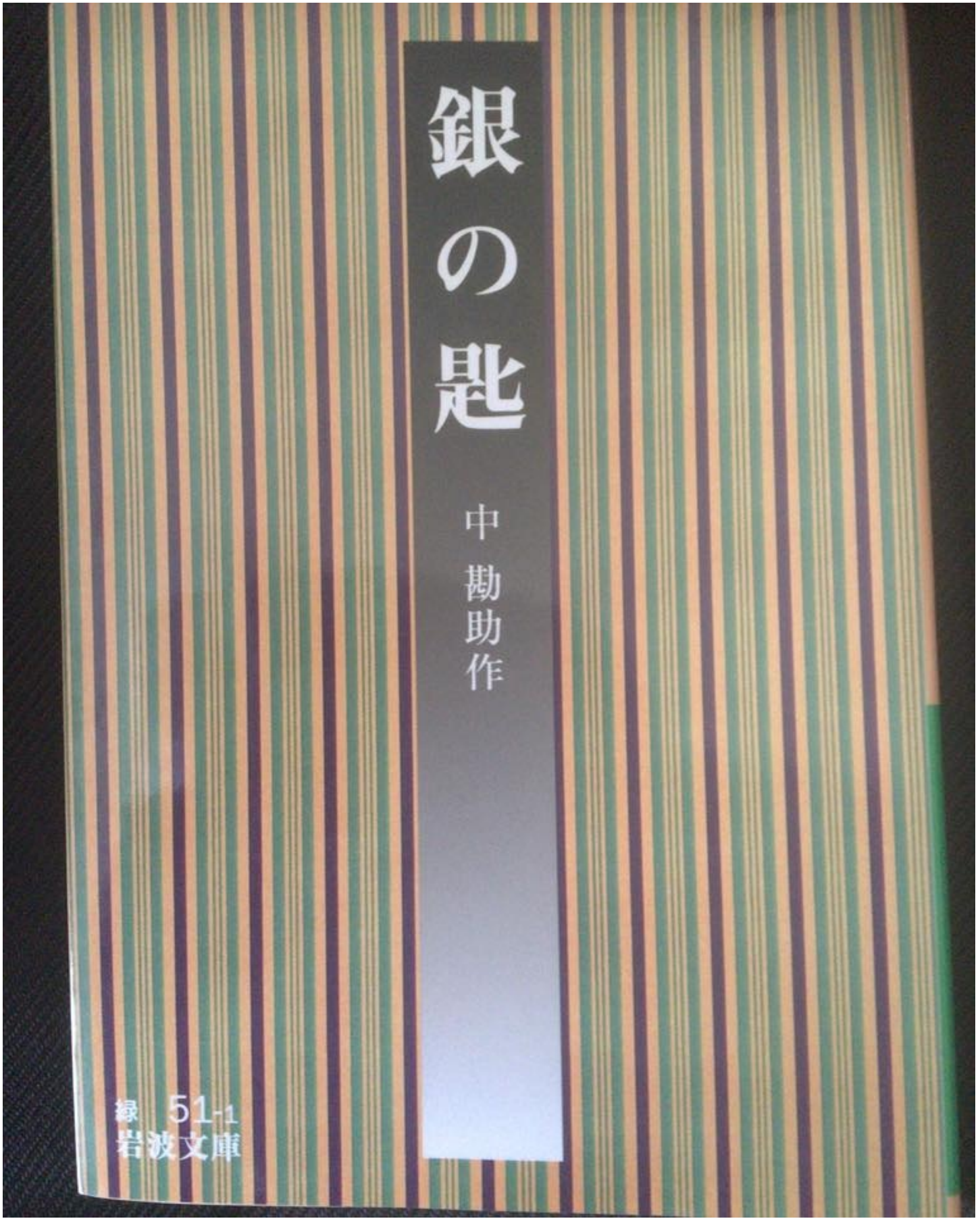
"どういう具合か、はっきり言ったわけではないが、決まりごとのようになった。双方から打ち明け話をするのだ。"デビュー作の本書でピュリツアー賞を受賞した著者が端麗な文体で描き出す表題作を含む9編のインド系移民の物語は移民政策を実質的に解禁した今年。あらためて読んでみたい。

個人的には、前述の移民政策解禁はもちろん、大阪を襲った大型台風による停電で、ロウソクで過ごさざるを得なかった夜に本書の存在を思い出し再読したのですが。久しぶりに読んで浮かんだのは【(文章が)うまい】【(著者が)やっぱりきれい】という何とも語彙に乏しくて申し訳なくなる言葉でした。

さておき、日本版表題作である【停電の夜に】より【病気の通訳】【三度目で最後の大陸】の方が、今回の再読では、より私的には好みだと感じましたが。平易な、されど選びぬかれた言葉による表現は本当に素晴らしいですね。あらためて著者の才能の豊かさに感心しました。

洗練された短編好きな誰かに、また移民側の視点からの物語に感心がある誰かにオススメ。

銀の匙



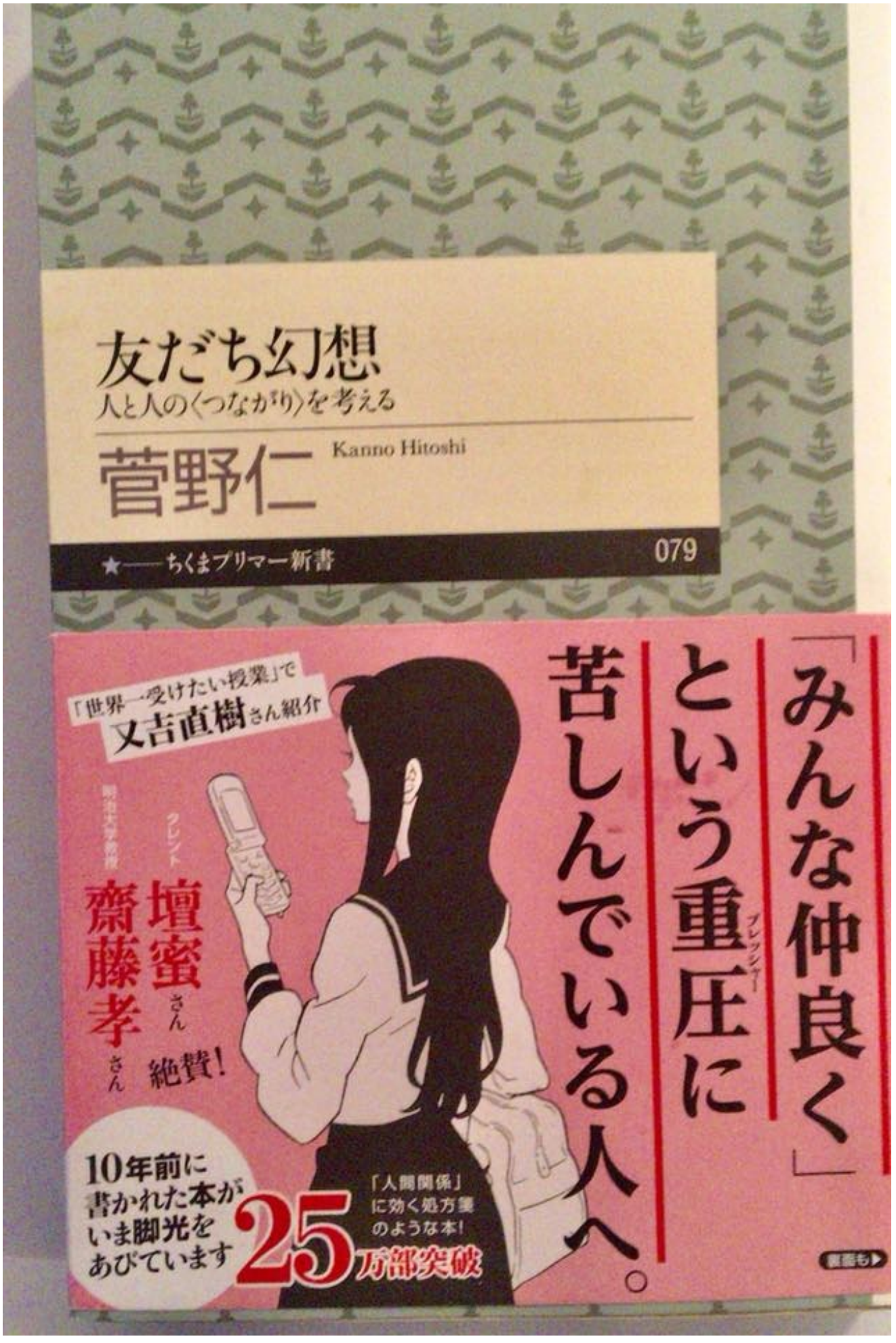
病弱だった"私"に薬を飲ませる為の銀の匙を"ひきだし"から見つけるところから、過去の少年時代を語り出す本書は、師匠でもある夏目漱石氏が【小説としては事件が起きないので俗物はほめないと思うが、私は好きです】

と言うように特別な事は確かに起きない。とはいえ本書だけを教科書に中高の6年間の国語の授業を行った橋本武氏が【何かを残す】為に選んだと語った様に時代を越えた子供の眼差し、美しい描写が確かに鮮やかに心に残る。

一方で、個人的には興味を持って筆者の事を調べてみると、作中に出てくる叔母、兄、2人の女性とのあっさりとした別れの描写の背景に、特別な想いを邪推してしまったりもしてしまう。

美しい日本語表現や、子供時代を思い出したい誰か、そして"この世界の片隅に"が好きな方にもオススメ。

友だち幻想


友だち幻想
人と人の〈つながり〉を考える
菅野仁
Kanno Hitoshi
★——ちくまプリマー新書
079
「世界一受けたい授業」で
又吉直樹さん紹介
フレント
壇蜜さん
齋藤孝さん
絶賛!
「みんな仲良く」という重圧(プレッシャー)に苦しんでいる人へ。
10年前に書かれた本がいま脚光をあびています
「人間関係」に効く処方箋のような本!
25万部突破
重版も

"学校では教えないことが二つあります。一つは、先に述べた『気の合わない人間とも並存しなければならない』ということと、そのための作法です。もう一つ教えないことは何かというと、『君にはこういう限界がある』ということです。"本書は年代に限らず人との距離感を考えさせてくれる。

個人的には、本書はそもそも社会学の専門家である著者が、中・高校生に向けて書いたとあって、随分と前に大人になった今では読みながら懐かしい気持ちになりましたが。さりとて、驚いたのは、読書会を通じて本書を読み解いていく内に、予想以上に様々な気づきを与えてくれたことだ。すっきり読みやすくも【問い自体の強さ】を感じた一冊でしたね。

"SNSのフォロワー数、コミュニケーション力が全て""メール(LINE)即レスする人ができる人間""話せば必ず相手に理解してもらえるはず""いくつになっても限界はない"みたいな【良くある話】にモヤモヤを感じている誰か。あるいは人との距離感自体に悩みを抱えている誰かにオススメ。

となりのイスラム

"近代以降の西洋社会が神から離れることで人間が自由を得ていくと考えたこととは、まったく違う考え方です。イスラムは、神と共にあることによって自由を得るのです。"シリアを、ヨーロッパでは移民を現地で研究し

た著者が【イスラムは怖い】という頭の中にある思い込みを解こうとしている本書は説得力に満ちている。

個人的には、恥ずかしながらイスラムについては本当に勉強不足を自覚しているわけですが。そんな自分にとって本書は、40年近くイスラム世界と良好な交流をしつつ、研究をつづけている著者だからこその【説得力のある知見】をわけてもらえるような刺激的な一冊でした。

そして、読めば読むほどに自分のイスラム理解が、ヨーロッパやアメリカといった西洋社会側一辺倒の視線か、ハラール認証といったビジネス側だけの視線だけに【極端に偏っていた】ことに気づかされて、とても恥ずかしく思いました。やわらかい語り口もあって理解もしやすい良書ですね。これは。

イスラムについて理解を深めたい人に、またイスラム国や難民問題などの背景を理解したい誰かにオススメ。

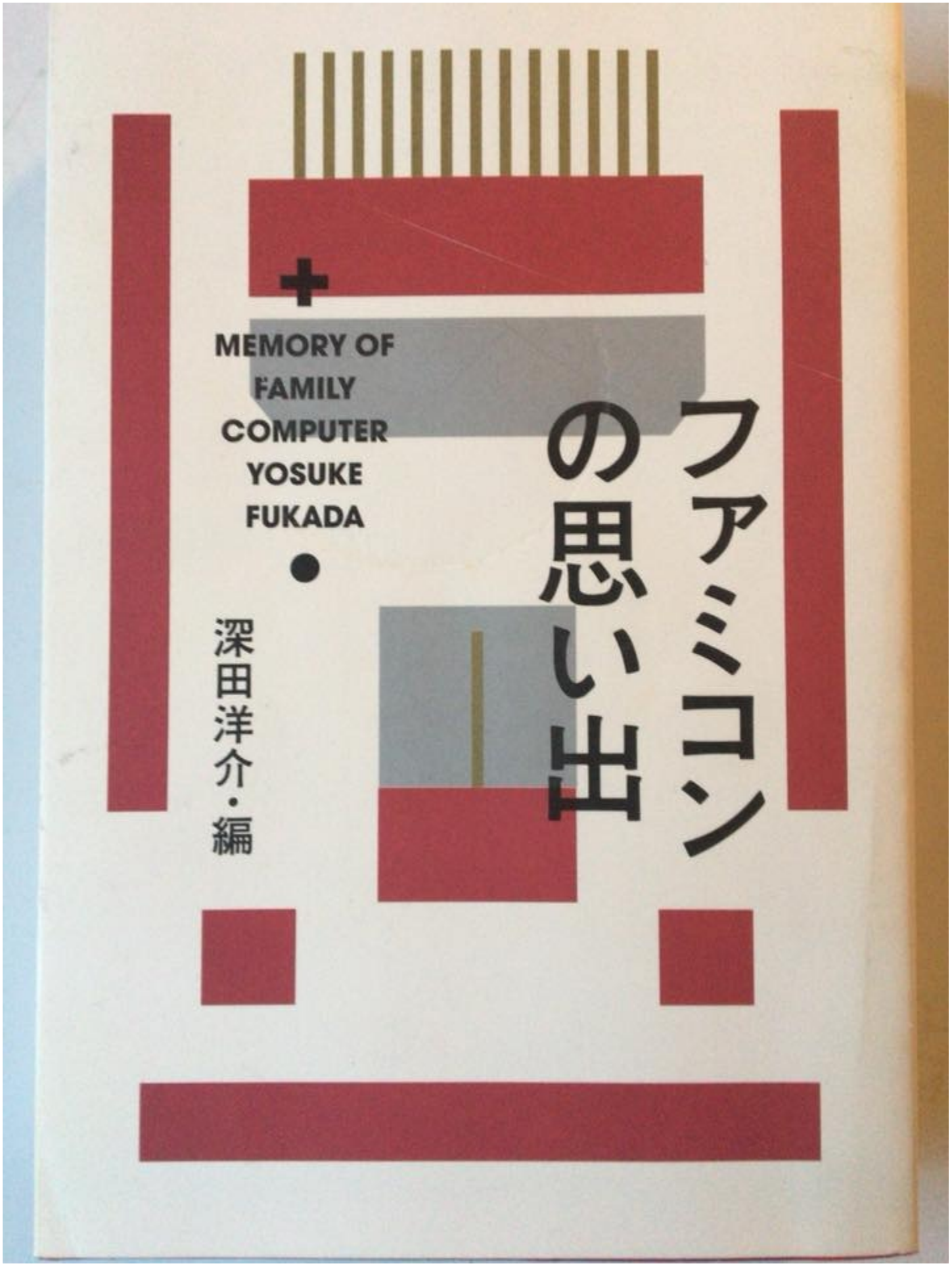
クラウド・コレクター
[手帖版]
CLOUD COLLECTOR
クラフト・エヴィング
商會
CRAFT EBBING & Co.
ちくま文庫

”さかさまに降る雨は、私たちの記憶を少しずつ削りとるようにして天に運んでゆく。それはやがて雲に結するだろう・・・雲とは忘却の結晶である。雲とはわれわれの失われた夢であり、見知らぬ懐かしさなのである”本好きでも知られるでんぱ組.incの夢眠ねむさんが好きな事でも知られる本書はメタ小説として本筋は「不思議の国のアリス」や「オズの魔法使い」からイメージされるフィクションとしてリズミカルに進みつつ、語り部の存在により導入と結末はあり得なくもない話？と読み手に思わせる説得力の構成が素晴らしい。

また写真メインの98年度版、そして今回の「手帖版」と新たに編集された2004年発刊の本書。そして著者達が”いつかもう一度”とあとがきで述べている様に、またいつか。新たな形で本ができる時にはどんな姿になるのだろうか？そんな進行形の楽しみも感じさせてくれます。

大人になった絵本好きな誰か。ブックデザイナーを目指す誰かに。そして”夢を見ながら、二兎を追い続ける”誰かにもオススメ。

ファミコンの思い出



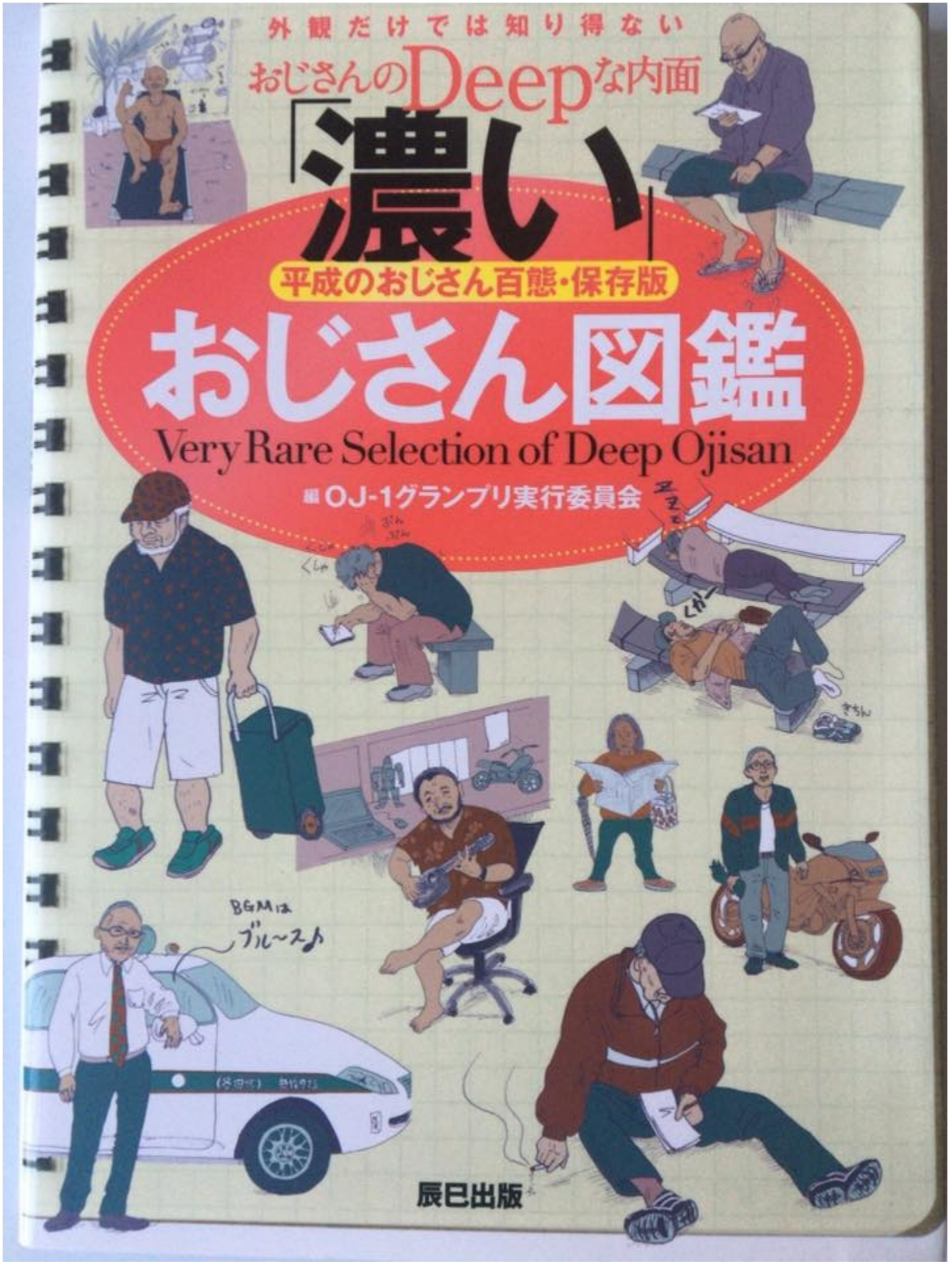
"僕たちにとってのファミコンとは、サブカルチャーでもオタクのものでも、ましてや害悪などではなく、子どもだった僕たちに人間関係や社会との接点を広げてくれる大切な相棒だったように思うのです"団塊Jr.世代の著者による本書は、解説や攻略ではない文化としてのゲームを伝えてくれる。

個人的にも、ファミコンが小さくなって【クラシックミニ】として再発売され人気をよんでいる今だからこそ、傍らに置いて、家族や恋人、友人との会話のスパイスや補助線として、むしろ説明書代わりに備えておきたい一冊だと感じました。

そして、巻末の"一時代を築いた『ファミコンブーム』という社会現象は、一人ひとりのファミコンとの思い出の集合体であり、僕たち一人一人がその歴史をつくった当事者だったのです"に【これはゲームであっても、遊びではない】あらためて呟きたくなったり(違)

クラシックミニを購入して、誰かにファミコン周辺について語りたくて仕方のない誰か、文化としてのゲームに関心のある誰かにオススメ。ホッコリします。

おじさん図鑑


外観だけでは知り得ない
おじさんのDeepな内面
「濃い」
平成のおじさん百態・保存版
おじさん図鑑
Very Rare Selection of Deep Ojisan
編OJ-1グランプリ実行委員会
BGMは
ブルース♪
辰巳出版

"OJISAN(おじさん)略して OJの観察を目的として、街おこし、地域活性化の促進を図る団体。本書はこのグループの一員が実行委員会を構成して、ノミネートに値するおじさんを厳選して編纂した。"悪いOJが跳梁跋扈する今だからこそ(濃くても)良いおじさんを見抜くヒントを本書は与えてくれる。

個人的にも。ネット界隈で OJの話題がどちらかと言えばネガティブに語られすぎやしないか？と感じるので、地域活性に繋がるかは別の問題として(笑)非難の眼差しではなく【笑いと理解の眼差し】を与えてくれる本書は意外と今こそ貴重な機会を与えてくれるのではないか？と感じました。

通勤・通学時に遭遇する濃い OJに実は興味あるけど話しかける勇気はない誰か。あるいはお父さんとの距離を縮めたい誰かにオススメ。

あたらしいみかんのむきかた

"私と『あたらしいみかんのむきかた』のかかわりは、ある日むいたみかんの皮が、さそりに見えると思ったことがはじまりです。(中略)どんな出来事でも、小さな可能性を信じることから始まるのです。"2010年に発刊され【みかんの皮アート】ブームを巻き起こした本書はいつ見てもクリエイティブ。

個人的にも、暑い夏も終わりが見えつつある気のある最近、少し早く次の秋や冬の季節に想いを馳せて久しぶりに本書を手にとったわけだけど。紹介される、みかんの皮による様々な動物の似姿はさながら動物園をめぐる感覚で、ほっこりしました。そして今年こそ自分もチャレンジしてみようかな？と、そんな密かな野望を燃やしてみたり。

みかん好きな方はもちろん、子どもと一緒にコタツに入りながらアートしたい誰かにもオススメ。

蜂蜜と遠雷

"交差点で耳にした音を反芻した。蜜蜂の羽音。子供の頃から耳に馴染んだ、決して聞き間違えることのない音だ。"昨年、史上初の直木賞・本屋大賞のダブル受賞で賛否も含めて話題になった本書はピアノに詳しくなくても、その音の描写の豊かさ、楽しさに圧倒される。

個人的には、良い意味でそれぞれの登場人物を漫画の様にわかりやすく設定して、多くの人に関心を持ってもらう事を意図しつつ(みんな魅力的で、良い人たちばかり！)一方で著者自身が大のピアノ好きであるからこそ、それぞれの登場人物の成長を描きつつ【楽曲やコンクール自体の魅力】を確かに伝えたかったのかなあ。と感じました。うん。愛を感じましたので(笑)

音楽に興味がある人はもちろん、興味がない人にも文句なしにオススメ。また爽やかな読後感を得たい青春群像小説好きな方にもオススメ。

奥付

優しい気持ちになる本

http://p.booklog.jp/book/125110

著者 : waon0317
著者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/waon0317/profile

感想はこちらのコメントへ
http://p.booklog.jp/book/125110

電子書籍プラットフォーム : パブー（http://p.booklog.jp/）
運営会社：株式会社トゥ・ディファクト